H30年度　学校評価のための自己評価集計から

1.共通項目の結果の比較から見えてくるもの・・考察と具体的な手立て・・・

(1). 生徒・保護者・地域アンケートと教職員による自己評価集計数

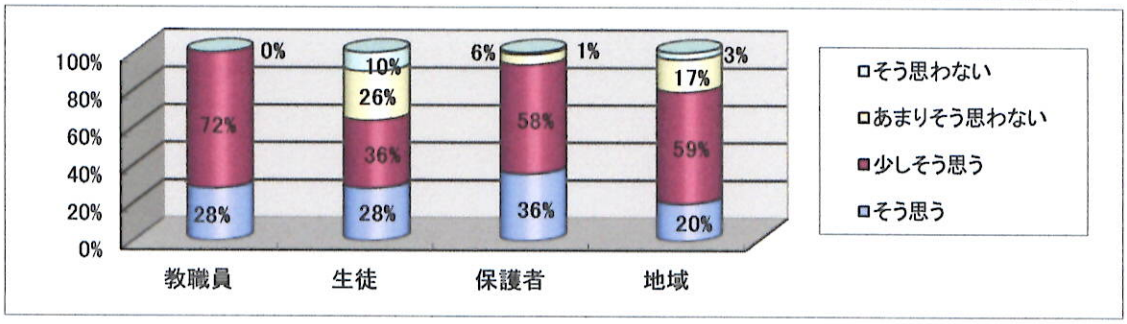
	在籍数	集計数	回収率
教師	20	20	100%
保護者	220	204	93%
生徒	220	207	94%
地域	546	149	27%
全体	1006	580	58%

(2). 集計内容

※　表内の数字は集計数を百分率(四捨五入)で表示しています。また、無回答については集計数に入れていません。

①　布佐中は積極的に地域との連携を図っている。(生徒:地域の行事に積極的に参加している。)

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	28%	72%	0%	0%	100%
生徒	28%	36%	26%	10%	100%
保護者	36%	58%	6%	1%	100%
地域	20%	59%	17%	3%	100%

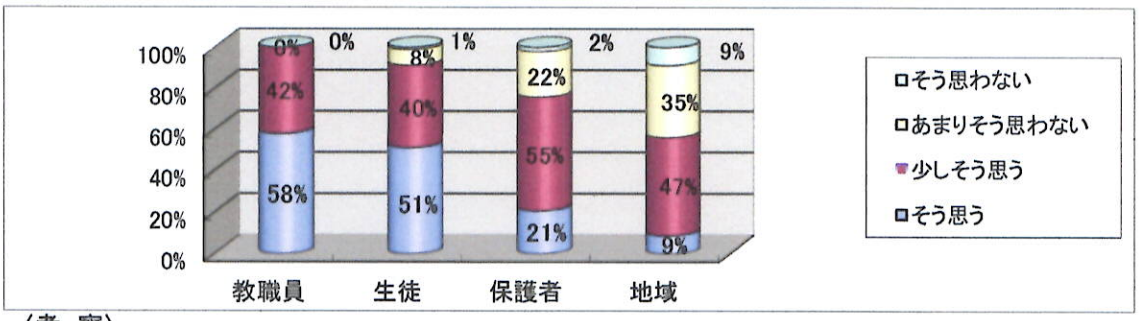


〈考　察〉

教職員や保護者は学校が積極的に地域と連携している認識がある。布佐中で行っている「ふさカリキュラム」や「布佐タイム」が一番の要因と思われる。回答している地域の方も意識が高く、地域と一体となって小中一貫教育を進めていくことについてかなり浸透していることがわかる。しかしながら、この質問に対して地域の方の中にはわからないや無回答の数が少なくないことから、より布佐中での取り組みを今以上に発信していく必要性がある。今後は特定の生徒のみならず、多くの生徒の取り組みを地域に披露していく方策を考えたい。

②　布佐中生は互いのことを気づかい思いやりの心にあふれている。(いじめ根絶に向けて努力している。)

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	58%	42%	0%	0%	100%
生徒	51%	40%	8%	1%	100%
保護者	21%	55%	22%	2%	100%
地域	9%	47%	35%	9%	100%

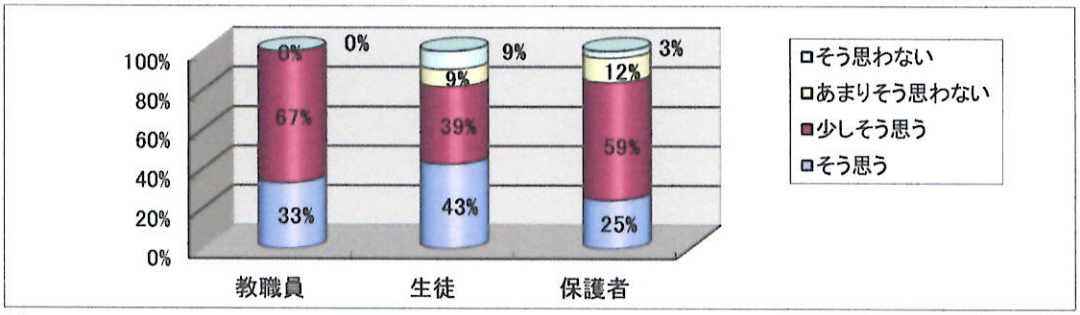


〈考　察〉

学校の生活を共にしている教職員・生徒からの評価は昨年度と同様で、いじめのない学校作りに向けて教職員、生徒は努力しているという意識があり、安心して通える学校という認識が高い。保護者からの肯定意見は75%と決して低くはないものの約1/4がそう思えないとの回答をしている。いじめ根絶に向けて学校での取り組みが保護者や地域にも見える形で発信していくなど、さらに豊かな心の育成に向けた取り組みが必要と感じている。

③ 授業の中でグループ学習で学び合う学習は楽しく、学力がつくと思う。(グループを活用して「活動と協同」のある授業を行っている)

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	33%	67%	0%	0%	100%
生徒	43%	39%	9%	9%	100%
保護者	25%	59%	12%	3%	100%

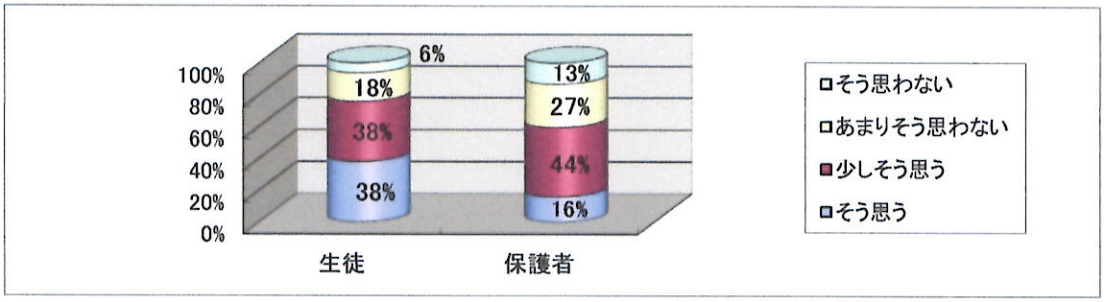


〈考 察〉

全校体制で「活動・協同的な学びのある授業」を推奨し、生徒たちの学力向上をめざして教職員は授業方法の工夫や改善に向けて努力している。その結果、学び合う学習は学力がつくと回答した生徒は昨年度と同様で評価は高い。保護者からの評価も84%の肯定意見で昨年よりも評価を得ている。今後は学力向上のために、更に生徒主体の授業を続けていくとともに、保護者に対しても学習の目的が「何を学ぶ」かではなく、「学んでなにができるか、何が身についたか」に大きな変革をしていることを理解してもらえるよう努力する必要がある。

④ 予習や復習など、家庭学習に熱心に取り組んでいる。

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
生徒	38%	38%	18%	6%	100%
保護者	16%	44%	27%	13%	100%

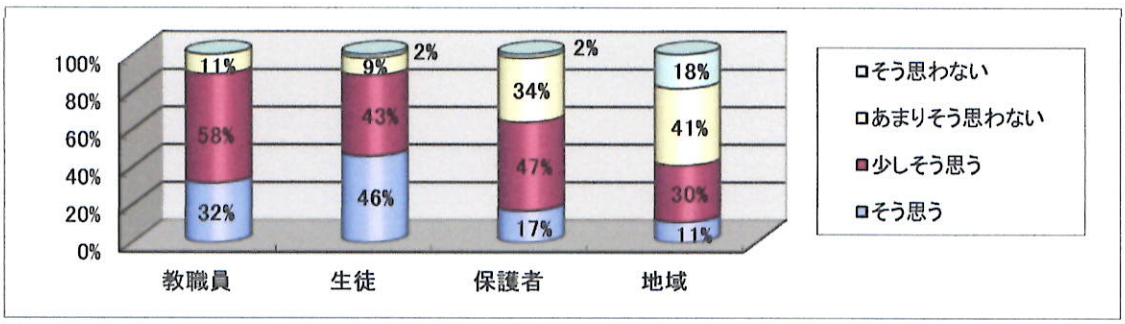


〈考 察〉

肯定的な評価は、生徒は75%、保護者は57%で、保護者の40%以上は家庭学習の不足を感じているようである。また、全くそう思わないと答えた保護者が13%存在することから、家庭学習の定着を課題として取り組む必要がある。小中一貫教育の目的・目指す生徒像に迫るためにも小学校からの家庭学習の習慣化・充実を図り、家庭の理解と協力、学校と家庭との協働を進めていかねばならない。

⑤ 布佐中生は登下校の時など挨拶ができ、挨拶にあふれる学校となっている。(社会の一員としての意識を身につけた生徒を育成するための指導をしている)

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	32%	58%	11%	0%	100%
生徒	46%	43%	9%	2%	100%
保護者	17%	47%	34%	2%	100%
地域	11%	30%	41%	18%	100%

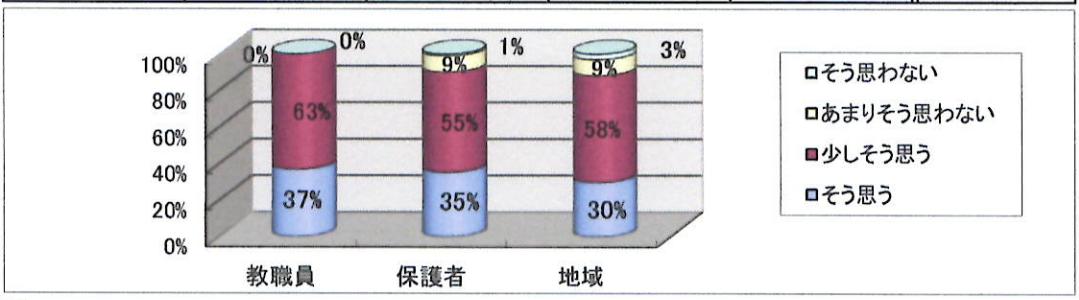


〈考 察〉

登下校時の挨拶については、教職員・生徒ともに比較的できている(指導している)と認識しているが、地域・保護者からの評価は決して高いものではない。保護者も含めた地域では、度重なる不審者情報などから知らない人とは話してはいけないとの風潮もあり挨拶に関しては芳しいものではない。また、地域の方からは「子どもと会わない、見かけない」との意見もある。現在行っている小中高と地域で連携して実施している「あいさつ運動」などをよい機会にしてお互いが顔見知りになる取り組みを今後も継続していく必要がある。

⑥ 学校HPや学校・学年だより等で学校の様子や情報を積極的に知らせている。

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	37%	63%	0%	0%	100%
保護者	35%	55%	9%	1%	100%
地域	30%	58%	9%	3%	100%

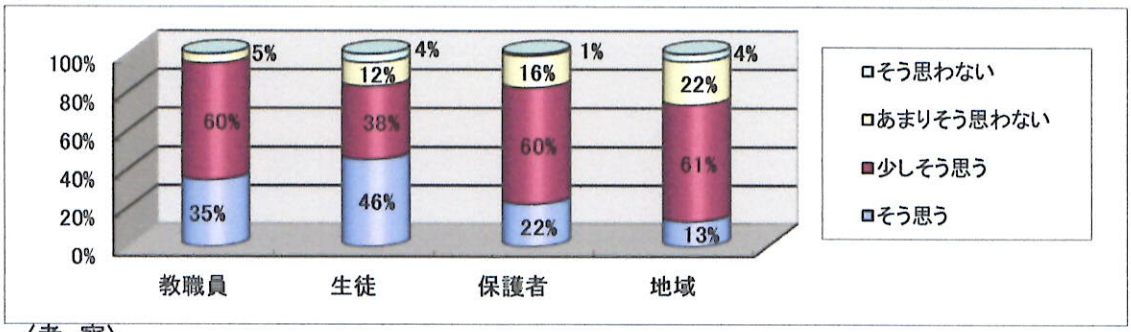


〈考　察〉

昨年度と比較しても教職員、保護者、地域ともに評価は変わらず高くなっている。特にHPの更新がタイムリーで読み応えのあるものが多くなっていることが要因と思われる。HPの閲覧数が今年度だけで12万を超えており、関心の高さがうかがえる。地域とともに歩む学校づくりをさらに推進するための手段として、HP・学校だよりの発行は大変有効である。今後も読みやすく、わかりやすい情報発信をしていくことが肝要である。

⑦ 布佐中生は避難訓練に参加して防災や安全に気をつけて生活している。（危険予知能力育成、安全管理など適切に行っている。）

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	35%	60%	5%	0%	100%
生徒	46%	38%	12%	4%	100%
保護者	22%	60%	16%	1%	100%
地域	13%	61%	22%	4%	100%

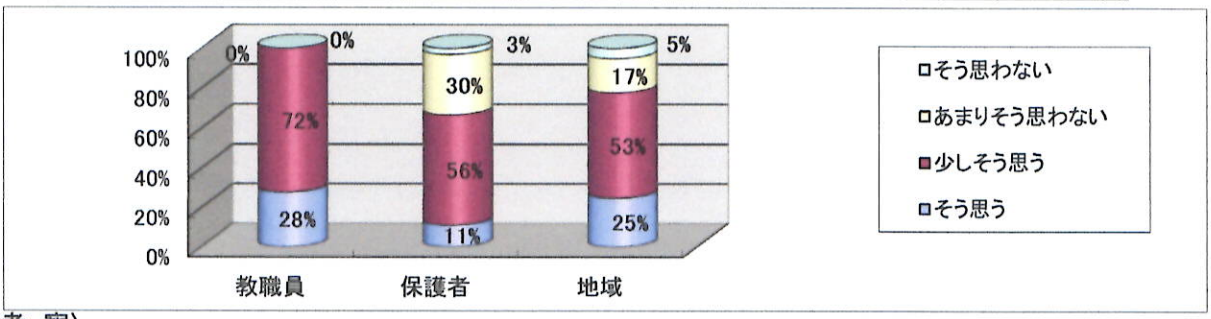


〈考　察〉

地震と水害を想定した避難訓練を年間を通して3回行っている。また、本年度は1月に利根川氾濫を想定して洪水ハザードマップから布佐小学校に避難する訓練を行った。肯定的な評価は教職員の95%をはじめとして概ね高い評価となっている。被災地となった際には中高生も地域の貴重な戦力となるため、今後も防災教育については力を入れて行くつもりである。

⑧ 「保護者・地域とともに創る学校」を意識し、様々な場面で生徒たちの様子を見守り声をかけるように意識している。

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	28%	72%	0%	0%	100%
保護者	11%	56%	30%	3%	100%
地域	25%	53%	17%	5%	100%

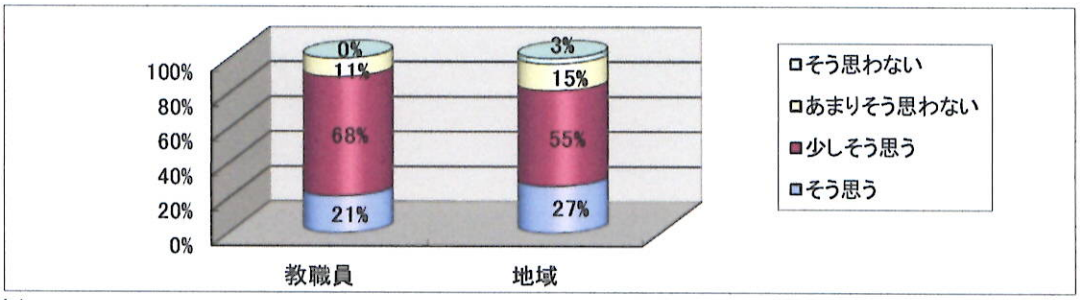


〈考　察〉

地域の「そう思う」との回答が昨年度同様に高い評価となっている。現在、布佐中区の登下校時になると多くの地域ボランティアの方が街頭に出て指導していることに驚く。また、地域ボランティアには安全支援のみならず本校では授業補助や個別指導教室の学習支援、図書室整備・貸出補助・花壇整備などの環境支援に至るまで多岐にわたって関わっている。さらに「ふさカリキュラム」「布佐タイム」の講師としてカリキュラムでつなぐ小中一貫教育の柱となる、なくてはならない存在となっている。しかしながら教職員・地域と保護者との認識に開きあることも否めない。文化活動発表会のような地域ボランティアと生徒たちとの関わりが保護者にも見えるような取り組みを授業参観や保護者会などでも披露するなど、さらに発信する必要があると思われる。

⑨ 布佐中は、家庭や地域と連携し、一体となって生徒を育てており、地域と共に小中一貫教育の推進を図っている。

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	21%	68%	11%	0%	100%
地域	27%	55%	15%	3%	100%

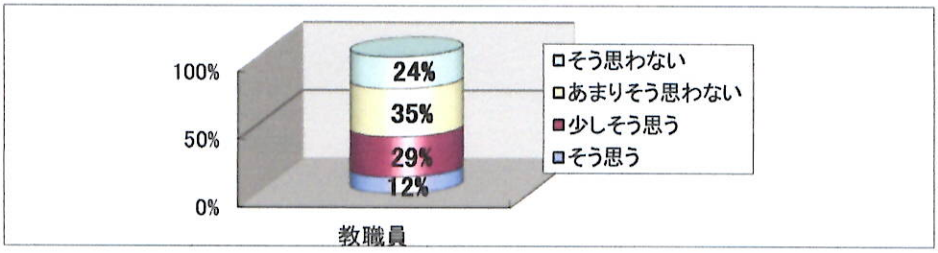


〈考 察〉

地域ルームの有効活用や学校支援地域本部事業による学校花壇・図書室などの環境整備、数学・英語・家庭科・技術科を中心とした授業や個別学習教室の学習支援などが進められており、教職員の中にも学力向上のために必要であることが定着した。今後は、小中3校の学校支援地域本部のコーディネーターが連携した小中一貫教育に向けての取り組みと小中一貫運営協議会を活用した取り組みをさらに進め、「みんなでつくる地域の小中一貫・ふさ学園」構想に迫っていけるよう努めていきたい。

⑩ 読書・読書活動の充実のための取り組みをしている。

	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
教職員	12%	29%	35%	24%	100%



〈考 察〉

一昨年度、昨年度と同様に教職員による自己評価のなかで最も達成率の低いものは、読書・読書活動の充実のための取り組みの推進に関してである。本アンケートは肯定意見が41%と決して多くはないが、取り組みを始めたことにより、1学期の29%よりも12%伸びた。今年度の学力向上のための図書室の活用として、できることから様々な取り組みを試行した。毎月各学年の学習内容に関連する図書を学年のフロアに自由にみられるコーナーを設置したり、ノー部活DAYの放課後地域ボランティアと連携して図書室を開室したり、学校司書を活用して授業実践を行ったりした。今後はこれらの取り組みを受けて、個々の教職員自身がそれぞれの教科・領域で図書をどのように生かすかをさらに進めていきたい。また、Basicにおいても読書活動を活性化していく取り組みを行う予定である。